

抽齋歿後

稲垣達郎

永井荷風は、例の『隠居のこゝと』⁽¹⁾で、『澠江抽齋』の興味津々たるゆえんの五点を挙げてゐるが、なかのひとつを、「伝中の人物を中心として江戸時代より明治大正の今日に至る時運變動の迹を窺ひ知らしめ読後自づから愁然として世味の甚辛酸に、運命の転蹶然たるを思はしむる処にあり」といつてゐる。

『澠江抽齋』における、時の推移とそれに対応する人間の運命とからおのずから滲しみ出ているあわれ——宗教的情趣を指摘したのは、少くとも文章の上では、永井荷風が最初だった。まことに的確な指摘で、同感である。

『澠江抽齋』には、注意すべきことがいろいろあるけれども、このことをもつとも重要なひとつである、かねがね思つてゐる。つまり、荷風が指摘してゐる他の諸点にも賛成であるが、『澠江抽齋』からの感動の根元のもつとも重要なひとつは、ここにこそあると考へる。

『澠江抽齋』の構成を、かつて西尾吏氏は、取扱われている事実ないしは事情の点から、つぎのように要約した。⁽²⁾

- 1 敬慕と親愛から生れた抽齋探究の進展（その一—その九）
- 2 抽齋の出自と環境（その十一—その二十四）
- 3 抽齋の生涯と業績および人間（その二十五—その六十五）
- 4 抽齋歿後の遺族（その六十五—その百七）

5 抽齋の妻五百歿後の遺族（その百八—その百十九）

ほかの要約もあり得るだろうし、また、人物の比重から、たとえば、3の要目のなかへ山内氏五百の経歴の件なども組入れることができるかもしれない。つまり、作者囂外の親愛感のとりわけ深い五百の出現と存在を、もう少し印象づける表現もあり得るかもしれない。が、取扱われている事実ないしは事情の展開の重点を、このままで、十分示し得ていることもたしかであろう。

ところで、「人物を中心」とする「時運変動の迹」は、全体にわたってうかがえるけれども、強くひびいて来るのは、主として、3以降においてであり、そのなかでも、いや、おうなしにそれを切実に感じさせるのは、4、5、特に4においてである。この時期に、明治維新という大変動がふくまれる。これを契機とする「時運変動の迹」はきわめていちじるしい。津輕藩のいわゆる目見え以上の医官抽齋澀江道純が歿後十年、あるいは十余年、その六男にして当主の澀江成善〔保〕一家とそれをめぐる人々の足どりを中心に、武士社会における最後の変動が、まざまざと浮かびあがる。周知のように、すでに、『西周傳』『能久親王事蹟』においても、この変革期の激動を、内戦初動の時点にあつて、幕府側のいわば中枢部に近いところで一喜一憂する人物を通してとらえているわけだが、澀江成善一家をめぐつての場合は、武士社会の中間層と、それにつながる者とのかなりひろい範囲にわたつて、しかもやや長い時間の経過のなかでかぶつた大きな波で、より人間臭く、まさに、「世味の甚辛酸に、運命の転蹊然たるを」感じさせる。

明治維新といえは、『安井夫人』においても、維新前夜としてある程度の交渉をもっているし、そのまえの『堺事件』は、維新の混乱期に偶発した国際的紛争に取材しながら、〈攘夷〉についていささかの批判をひそめており、そのあとの『津下四郎左衛門』は、ほぼおなじ混乱時に、〈尊王攘夷〉と表裏一体になった正義感が、歴史の展開

に伴つての価値観の転換にもかかわらず、歴史への参加者のある部分のなかに、どれほど深く食いこんでいるかを土台としている。

今ふれた、あとの二作品では、変動期の混乱がもたらした悲愴な犠牲が、スタティックにみつめられている（『能久親王事蹟』においても、ほぼ同様といえよう）。一方、『澠江抽齋』の4にあつては、変動と共に自然に推移する人間の、非常と平常の交錯するいとなみが、苦悩に裏打ちされながら、武士社会が崩壊——没落なり転身なりしてゆくすがたとしてとらえられている。こうした状況における人間群像を、鷗外は、自己の作品史上はじめてえがいた、あるいは、えがき得たのである。自己の作品史上ばかりではなく、日本の近代文学史上はじめて、といえるかもしれない。

こういう創造をやり遂げることができたのは、『澠江抽齋』をして、3をもつて終らしめなかつたこと、つまり人の生涯を記伝するにあつて、その人物の死をもつて終止としないという、もつぱらこの発想に基く。この発想に基いてジェネアロジックな方法を展開させたところに、独自の文学形象がなりたつたのである。

永井荷風は、〈抽齋歿後〉そのものの問題なり意味なりについて、特に強く指摘してはいない。が、「時運変動の迹」を、「江戸時代より明治大正の今日に至る」としているかぎり、もちろん〈抽齋歿後〉を組入れてのものであることはことわるまでもない。と同時に、〈抽齋歿後〉そのものにアクセントをつけようとする様子はないといえる。「江戸時代より明治大正に至る」時代の流れの全体にわたる叙述からのおのずからの感味として、「時運変動の迹」云々の印象が生れたとしてるのであろう。

これはこれでいいが、〈抽齋歿後〉に、いちだんとアクセントをつけたい。岩上順一の『歴史文学論』³⁾のなかの鷗外論は、公式主義的であり過ぎるとして、とかく注意からそらされがちだが、『澠江抽齋』についての論はなか

なか卓抜である。ここでも、この作品における〈抽齋歿後〉そのものの比重なり位相なりを、必ずしも取り立てていわないけれども、事実上、この部分が生命的に重要であることが、作品の分析の過程で語られているとみなされる。

この点を明確に強調したのが、伊藤整の『鷗外の「澠江抽齋」⁽⁴⁾』である。「この小説は抽齋の死後、その妻五百や子供たちの生活の変転を述べて、幕末、明治から大正にまで及んでゐて、そこにかへつて、澠江家の人々の運命の展開が、新しくうかがはれる。この作品の本体は、むしろ主人公抽齋の死後にあるかに思はれる」(傍点筆者)と言ひ、また、「明治維新の藩の崩壊から、抽齋の遺族たちの生活の変転を述べるところに来て、大きな波の轟くやうな大作品としての力を現はしはじめ、」(同上)とも書く。〈抽齋歿後〉にこの作品の本体があり、この部分の創出と存在が、この作品をして「大作品」たらしめているのである。

この見解と基本的にはおなじところに立っているのだから、渋川驍氏は、さらに、この部分の創出と存在が、この作品のジャンルとしての定着に関係していることを指摘している。すなわち、「たしかに、鷗外が、ひそかに自負したように、『澠江抽齋』は、その主人公の歿後の子孫およびその周囲を説き進めていったので、この作品は非常な質的变化をとげるにいたつた。もし抽齋一人だけの生涯でおわつていたら、史伝として成立したかもしれないが、小説としての要素は、まだ充分備つていなかったのではないかと危ぶまれるぐらゐだ。しかし、抽齋歿後が詳しく述べられていることによつて、史伝であつて、同時に小説である、史伝小説の実を獲得することになつたことは間違ひがない」とする。「抽齋歿後が詳しく述べられていることによつて」、この作品が、「史伝」から「史伝小説」へのジャンル上の「質的变化」を遂げたとみるわけだが、この「質的变化」は、〈抽齋歿後〉の、組入れられた事象そのものに負うばかりではなく、「抽齋歿後が詳しく述べられている」その述べられ方にも対応してのも

のだとする。つまり、事象の組入れと、その形象化の技法とに關係しての「質的变化」なのだ。

このかんの問題の実態を、渋川氏はこうみる。抽齋の生涯をえがいている、その六十五まで、全体の半分よりちよつと上廻る部分は、抽齋の生涯の変化が主で、だいたい「一人の人を中心にして話を展開してゆく」のだが、抽齋歿後は、人間關係が「急に複雑な様相を呈して」来て、「抽齋を中心にしていた生活の單純さとは似もつかないもの」になり、「各人物が絶えず入り乱れ、交互に出現」して来る。これを、技法上の点から、「綿織のみ入った糸のさばきを見ているようだ」と形容し、「いかにも巧みな構成法といわなければならない」と評価している。

抽齋歿後、人間關係と生活が複雑化してくるのは、明治維新を挿んだ時世の複雑化と対応するもので、〈抽齋歿後〉を組入れる以上、こうなるのは自然の勢である。渋川氏は、こうした複雑な事象に対する鷗外の鮮かなさばき方を評価しているわけだが、加わつて来た人間關係と生活の重畳味に技術がひそんでおり、そこから自然に出てくる興味なのだ。従つて、総じていえば〈抽齋歿後〉に負うことになるわけだ。

抽齋の生涯をえがいた部分にも、別様の複雑味が生じている。抽齋の生涯の伝記上の追求が、關係人物個々の伝記追求をもたらしているからである。これが、追求欲と技法上の問題とからみ合つて、複雑な様相をおびてくる。抽齋となんらかの点で關係のある者をはじめて登場するたびに、当該人物の略伝が述べられる。その十三における抽齋の師の市野迷庵、狩谷掖齋、その十四のおなじく伊澤蘭軒、この途中からその二十に至るおなじく池田京水、その二十の抽齋の先輩安積良齋、小嶋成齋、その二十一のおなじく先輩の岡本況齋、海保漁村、多紀蔗庭、伊澤榛軒、谷文晁。こんなぐあいに、さらに壽阿彌、友人の石塚豊芥子、森積園など、師、先輩、友人の順序でつきつぎに登場する諸人物について、まえに言ったように、登場するそのたびに、必ずいったん立ち止つて、略伝を叙

べる。なかで、痘科の師池田京水の場合などは、抽齋のときとおなじように、搜索の過程まで具象して、不均衡なまでにふくらんでしまう。このような小伝記の積重ねが、求心的に抽齋伝への方向をとる。このかんにおける、いわれているような私小説的方法が、形象化へのプラスの役割を果している他方で、〈求心的に〉とは言ったけれども、実際には、それぞれいちおう完結する小伝記の連鎖でもあるので、それぞれのあいだに、多少ともの断絶をまぬがれず、文学上の表現としては、それなりに、流露感にすぎまを産む。まえに、〈別様の複雑味〉などといったのは、こういうすぎまを孕んだ、非小説的複雑味の云いなのだ。

ところが、〈抽齋歿後〉になると、この種の複雑味が見えなくなり、渋川氏の指摘するような、さまざまの人間関係や生活の、自然な複雑味になってくる。師、先輩そのほかの紹介がいちおう完了し、小伝記の積重ねなり連鎖なりを必要としなくなる。挿入される小伝記は、きわめて僅かになり、そういう小伝記の完結性による断絶無しに、それぞれの人間が自由に関係し合い、彼ら自身、生活を展開させるのである。ここに、技法上でもおのずからの推移を伴い、渋川氏のいう作品としての質的变化を遂げるにいたったのである。

ところで、こういうみごとに結果を招くことになったそもそものは、まえに、その関係にちよつとふれたのだった。人間の伝記的把握に際しての、人間形成におけるジェネアロジックなもの内在を認めるところからの、ジェネアロジックな方法の可能性に対する信頼による、伝記の新しいスタイルへの発想だった。

『西周傳』や『能久親王事蹟』の時代には、もとよりこの発想はなかった。その生涯のきわめて平凡な編年体の叙述でしかなかった。

ずつと降って、『興津彌五右衛門の遺書』の改作にあたって、ジェネアロジーに対する関心が顔を出した。しかし、これは一種後日譚めく附けたしであり、小説のメカニズムとは無関係である。

鷗外は、こう考えた——「前代の祖父の事蹟に、早く既に其子孫の事蹟の織り交ぜられてゐるのを見、其絲を斷つことをなさずして、組織そしよの全體を保存せむと欲し、叙事を斷續して同世の状態に及ぶのである」と。(補一)これが、伝記文学作品におけるジエネアロジツクなメカニズムである。洪川氏の言うように、「ひそかに自負した」ものだつたにちがいない。そこで、伝記の「体例」についてのこの発想が、いづごろおこり、(補二)構想として、いづごろ成熟していったのだらうかは、必ずしもあきらかでない。ここにやや端的に示されている方法上の概括は、じつは『澀江抽齋』につづいて書かれた大作『伊澤蘭軒』の終章のひとつ手前の、その三百七十で語られているのである。つまり、この地点でようやくおこなつた言明なのだ。一方、この箇所が発表されたのより数日前の日附で発行された雑誌「斯論」に載つた『ななじきり』では、これらの伝記の「體裁をして荒涼なるジエネアロジツクの方向を取らしめたのは、或は彼かゾラにルゴン・マカアルの血統を追尋させた自然科学の餘勢でもあらうか」という、遠くから培われてきた科学者である、かれにとつての当然の帰結とされるわけだ。もとより、それはそれにちがいなからう。が、この先で、また「何故に現在の思量が傳記をしてジエネアロジツクの方向を取らしめてゐるかは、未だ全く自ら明にせざる所で、上かみに云つた自然科学の影響の如きは、少くも動機の全部では無さうである」といつている。してみると、かれのなかの科学性を自然な契機としながら、しかとしたモチーフを認識し得ないままに、「ジエネアロジツクの方向」が取られてしまつたのである。そして、事実上、先に引いた、ジエネアロジツクの方法の原理が、『澀江抽齋』において具象される結果になつた。ということは、『澀江抽齋』の創作過程そのものを通して方法上の問題が確認されながら、はじめてそうした作品としてなりたつたことになるのだらう。

そうだとしても、たしかなのは、その前提に、なによりも抽齋の遺族・後裔に対しての並ならぬ親愛感が存在したことである。

武鑑の蔵書印に見えた「弘前醫官澀江氏」を探索しているうちに、遺族——娘陸ふく、すなわち長唄の師匠をしている杵屋勝久、その弟保、二人の甥に当る青年終吉、の三人が現存することをつぎつぎに知った。このかんの経緯は作品にしるされている通りのようだ。最初に連絡のとれた図案家の終吉は、まだ若輩だった。昭和になつてりっぱな『名物裂の研究』を出版するけれども、上野の博物館における調査には、もともとと隅外による便宜があつたという。真実どういふ人物として印象づけられていたかはわからないけれども、抽齋探索発展のいとぐちをつけてくれた大事な青年ではあつた。当時すでに七十歳だった勝久とは、直接ふかい交渉はなかつたであらう。いよいよ明日から連載がはじまるという日、保とその娘乙女、終吉、抽齋探索協力者の軽津人外崎覺、これらの人々と共に勝久も招待されて森家を訪れている。はじめての会見だった。その後は幾度も会つた様子はない。彼女についての知識は、もっぱら保を通してのものだったようだ。それに、勝久の並ならぬ才女であることを確認したのは、おそらくは連載もやがて終ろうとするころ、保から届いた「至極面白6」い、「陸様書付7」を読んでからであらう。さいごに保は、必ずしも裕福でない五十九歳の文筆家だった。交渉のすすむにつれて、なかなか異色ある存在であることや著書は約百五十部もあるけれども、「概皆時尚を追ふ書估の誅求に應じて筆を走らせ8」て、精力を「徒費9」していったことの惜しむべきであることなども、次第にわかつて来たにちがいない。かくて、とにかく、現存する抽齋の後裔三家について、多少とも親疎の別はあつたとしても、それぞれの個性に対して、相応の好意と興味をもつたろうことは疑えない。

が、それにしても、保が幾回にもわたつて提供してくれた、父抽齋と彼をめぐる人々についての手稿は、抽齋への魅力と親愛感を深化させる求心力の他方で、同時に、いくつかの焦点へ向つての遠心力を発揮させた。祖先、師、友人、家族、親戚、門人へとカメラを移動しつづけるなかで、親愛の焦点がピツタリ合つたのは、抽齋四人目

の妻五百と、「抽齋の親戚は少なからざれど、第一に指を屈すべきは」⁽¹⁰⁾と保がしるしている比良野貞固とのふたりだったことは、作品を読んだほどの者なら、誰しも認めるはずだ。とりわけ、五百の発見は、容易ならぬよろこびだったにちがいない。抽齋への親愛感が、為に倍加するくらいではなかったか、とさえ想像される。安井夫人佐代とはまた別の才女の典型がここにいたのである。抽齋歿後、これほど稀有な女性の、その生涯はどう経過されたであろうか。抽齋歿後の、たんなる後日譚程度のものでして処理することに、果して堪えられるだろうか。『澀江抽齋』が、ジエネアロジックな方向をとらなければならなかった最も有力なモチーフなり契機なりは、五百の発見のなかに、おのずから内在していたものではなからうか。意識するとしなやかにかかわらず、おのずからの強い内在であり、〈抽齋歿後〉の追求のエネルギー源ないしは核となつて、〈抽齋歿後〉の複雑な人間関係、すなわち五百を中心とする家族、親戚、友人などの生活や動向を、ほとんど飽くところなく、ていねいにあとづけさせたのであろう。『伊澤蘭軒』における〈蘭軒歿後〉は、『澀江抽齋』におけるほどの生彩はない。やや情性的なジエネアロジック方式に過ぎない。五百のようなエネルギー源が欠如していたからにちがいない。あとでちよつとふれるはずの、柏軒の妻俊などもいるにはいたのだが、これはよほど間接的な関係になる。

そこで、五百は、どんなすじみちで、また、そもそもどんな映像として視野に入ってきたらうか。

五百というと、抽齋が、脅迫する不逞の詐欺侍と対峙していた時、おりから入浴中だった五百が、けわいを察して、腰巻ひとつを身に着けたまま、懐剣をくわえ、熱湯を入れた小桶を持つてあらわれて賊を退散させるくだりがすこぶる有名である。鷗外は、「此一條は保さんもこれを語ることを躊躇し、わたくしもこれを書くことを躊躇した⁽¹¹⁾」と書いているけれども、その実、作品中での庄巻だと一般にいわれる。とにかく、五百の強い個性を端的に具象していて印象深いことはたしかである。けれども、鷗外が、この逸事を知ったのは、おそらくは「五百の経歴」⁽¹²⁾

(その三十一—その三十五) などを書き終えた後のことに属すると思われる。ついでをもつていえば、本来は「五百の経歴」のなかへ、ないしは抽齋四度目の迎妻のところへ早く組入れられるべき性質の、その百七の「五百婚嫁の逸事」⁽¹³⁾なども、ほぼおなじころ視野に入ったものと思われる。このあとの場合の作品中の章次を、構成上の工夫によるものとする説の誤解であることを材源との比較研究から、小泉浩一郎氏も『涇江抽齋論—出典と作品—』⁽¹⁴⁾で指摘している。この二件を故らにもち出したのは、五百の最初のイメージづくりに、これらの有効性のゆたかなきわだつた逸事は、まだまだ媒介とされていなかったことに注意したいからである。

その九は、「氣候は寒くても、まだ爐を焚く季節に入らぬので、火の氣の無い官衙の一室で、卓を隔てて保さんとわたくしとは對座した。そして抽齋の事を語つて倦むことを知らなかつた」ではじまる。いうまでもなく保との初対面の場面で、作品中でも最も美しく、わたくしの好きな文章である。鷗外日記では、この日は一九一五年(大正四)十一月二日である。とすると、「抽齋の事を語つて倦むことを知らなかつた」というけれども、これは氣持の上のことだけで、ほんとうは、倦むことを知らぬくらい語り得るほどの抽齋知識は、まだなかつたろうと思われる。おそらくは、武鑑についての抽齋の造詣と、外崎覺から写しをもらい、さらに実地について確認し得た下谷感應寺にある抽齋墓誌銘を中心とする若干の伝記上の事実、その一週間ほどまえの十月二十四日に届いたはず(日記には見えず)の保書簡の、「抽齋先生ノ面目髣髴トシテ心頭ニ現ジ來リ歡喜ニ不堪候」⁽¹⁵⁾という内容に当るものなどがまず既得の抽齋知識だったとみなしていいだろう。保書簡の内容は、おそらくは生き生きと記述された有力なものだったろうと思われるけれども、正体はつかめない。なかに、五百への言及があつたかどうか。また、「抽齋の事を語つて倦むことを知らなかつた」うちに、五百に全くふれなかつたとも考えられないが、しかしまた、多少とも立入つて語る機会ではなかつたように思われる。

この初対面のおり、鵬外は、「父の事に關する記憶を、箇條書にして貰ふこと」を頼み、保はそれを諾した上、「追憶談」を載せている山路愛山主宰の雑誌「獨立評論」を見せる約束をした。⁽¹⁶⁾「父の事に關する」という。鵬外は、まだ抽齋その人のことで頭がいっぱいだったのである。一日おくと、保に手紙を書いた。さっそく古武鑑と抽齋とのことを書きたいこと、つづいて抽齋学業の全体を書けないかどうか、その材料を提供してほしいこと、抽齋年譜のようなものを作りたいこと、だいたいこんな要目である。⁽¹⁷⁾やがて鵬外は、大正天皇即位式のため京都へ行った。間もなく、保からは、すでに稿が成ったと知らせて来た。行事が終つて十八日に東京へ帰ると、「直に」⁽¹⁸⁾保を訪ねて、「書きもの」⁽¹⁹⁾を受取り、「獨立評論」も借りて来た。作品には「直に」とあるけれども、じつは鵬外は忙しく、例の『盛儀私記』を綴つたり、リルケ『白衣の夫人』の翻訳をしたり、さらに重要なのは陸軍からの引退申出をしていたりで、けっきょく、十二月一日によりやく保を訪うことができた。その時得た「書きもの」(書簡では「書拔」)は、おそらくは、『澀江家乗 單』と鵬外が題簽して一冊にまとめてあるうちの、外崎覺提供の「津輕藩日記」ほか一件、「富士川游藏抽齋手記抄」、感應寺墓誌銘(ことによると『愈語』についての部分も)などを除いた大部分を内容とするものだったと思われる。『澀江家乗』については、東京大学図書館鵬外文庫から『澀江抽齋』材源の諸本を発見した一戸務の『鵬外作「澀江抽齋」の資料」⁽²¹⁾にややくわしい紹介があることは周知だが、今(大)部分)といつたうちの、巻頭に据えられた(澁江氏系図)が保の自筆である以外は、すべて鵬外の筆で、おそらくは、保の手稿から抄録したものである(先にふれた十月二十四日入手の保書簡も、多少は吸収されているかもしれないが)。この部分に該当する保自筆本は伝えられていない。一戸氏はふれられなかったけれども、じつはこの部分に五百についての重要な記述がある。左のごときものだ。

(*) 伊澤柏軒の妻となつた狩谷椽齋の娘俊が「和漢の學に通じ、少納言の称あり」というのに引続き) 抽齋の妻五百(保

の母)は新少納言と呼ばる。二女皆詩集、文集、雜著若干卷あり。

(*三番目の妻岡西氏徳の歿後*) 抽齋又山内忠兵衛の妹五百^ハを娶る。時に年二十九。山内は神田紺屋町の鐵間屋にて豪商なりしかど、士人の商家の女を娶ることを許されぬ故、五百は比良野文藏の養女となりて來嫁す。五百は經籍を佐藤一齋に学ぶ。書は初め生方^{まうた}貞齋に学びぬ。卷菱湖の門下に萩原秋巖、中澤雪城と此貞齋とありて、三傑の称あり。貞齋の筆力最も優れたりき。只酒癖あり。後人に暗殺せらる。五百は後、藤千蔭の手本を習ひ、又近衛遙楽院の手迹を慕ふ。(此事疑あり) 五百は又画を谷文晁に、歌を前田夏蔭に、狂歌を太田南畝^(マユ)に学ぶ。五百夙くより津藩藤堂和泉守高猷に仕へて中老たり。五百は文化十三年丙子に生れ、明治十七年死す。年六十九。このあと、五百の産んだ最初の子棠^{たぢ}(抽齋には三女)以下保「成善」に至る九児の生歿を列記してある。ほかに、墓のことや戒名などが書きとめられている。やや抽象的な概括に近いが、世の常でない女性の面影を浮べるのに十分である。

こういう内容をふくむ「書きもの」を受取ると同時に借りてきた「獨立評論」の部数や題目は、作品には書かれていない。掲載された保の追憶談は、『澀江抽齋』に關係のあるものだけで十余題目、十幾冊にも及んでいる。ところが、十日後の十二月十一日付の手紙に、「拝借ノ獨立評論二冊寫畢返璧申上候」とあるから、あとですべてを見たとしても、その時はこの二冊きりだったのであろう。鵬外はそれを写し終ったという。これは、やはり鵬外文庫の『雜記^{丙辰}人名類 一』と鵬外の題簽のある自筆覚書のなかにのこされている。巻頭に「津輕氏」と朱書し、つづいて「大名の生活」と小見出しをつけている部分がそのひとつである。これは、保談話の『大名の生活^上』(附、相馬大作の事、町人氣質の事)(一九一四年七月号)の要約で、箇条書にするとつぎのようになる。(1)津輕・南部兩家

確執の問題、(2)本皓・寧親、君臣ながら同輩の如く、親しむこと、(3)五百、十一、二歳で本丸に出仕、夕方、廊下に鬼が出る、本丸から下り、人に頼んで大名に仕えようとして二十余家に見見えに往くこと、(4)藤堂家年始福引のこと、(5)五百の藤堂家時代のお櫃改めのこと、(6)五百、藤堂家を下ること、(7)五百の父の谷文晁・大田蜀山人との交友逸事。以上のうち、とくに(3)(6)が五百に関係するところが多い。

もうひとつの部分は、おなじく保談話『小島成齋先生(附、市野迷庵、石塚豊芥子、壽阿彌陀佛に關する事ども)』(一九一四年五月号)からのメモで、「五百未だ抽齋に嫁(マヤ)ぜざる時抽齋を訪ひしに、豊芥子來合せて、竹の皮包の鮓を出し、五百に侑めしことあり」の一節もみえる。なお、この『雜記』の巻末に、右にかかげた『澀江家乘』からの引用中に出た佐藤一齋以下の五百の師と五百との、五百誕生の文化十三年から明治元年に至る対照年立てが見えてゐる。このへん、まえの小泉文がいつているように、まさしく「五百造型への鷗外の積極的意欲を窺うことができる」わけだ。ところで、『大名の生活上』および『小島成齋先生』中の五百事蹟は、作品その三十一、その三十二、その三十三、その三十四などに吸収されている逸事で、はじめの三章では、右の『澀江家乘』からの引用の「五百夙くより津藩主藤堂和泉守高猷に仕へて中老たり」を拡大補充しており、五百の強靱な気性と才能を示し得て十分といふべきものだ。

だいたひ以上によつたものが、『澀江抽齋』執筆にやや先立つて用意された五百についての記録である。その後作品進展中の、おそらくは、一九一六年(大正五)の二月から三月へかけて、保筆録の『抽齋歿後の澀江家と保附五百』(鷗外題簽『抽齋歿後 單』)が、幾回にもわたつて送られて来るに従ひ、五百の人間像がますます充実していつたわけだ。まえにふれた、詐欺漢退散的一幕、抽齋妻としての自薦、いずれもこの過程での肉化である。五百の肖像は、その死をもつて完成するわけだが、『澀江抽齋』出版に際して捉え得ていた五百像は、まだまだ片影でしか

かった。しかし、それだけでも、ある程度のイメージ形成には事足りたろうし、同時にまた、全体像ではなかったそれだけに、その全体像完成への意欲が波打つのは自然であろう。そこにジェネアロジックへの端緒もあるだろうし、〈抽齋歿後〉が書かれるべきものの、有力な、少くともひとつが内在していたのではなからうか。

(注)

(1) 『隠居のこと』(岩波書店版『荷風全集』第十五卷) * 『澠江抽齋』についての初出は、雑誌「女性」連載『耳無草』のうち、一九二三年八月号所載。同年四月、決定稿『澠江抽齋』が、はじめて第一次『鷗外全集』第七巻に収録刊行された。

(2) 西尾実『鷗外の歴史小説』(一九五三年九月、古今書院刊) 所収『「澠江抽齋」の分析』* 初出表題『澠江抽齋』(『文學』一九五二年四月号特集「鷗外について」)

(3) 『歴史文學論』(一九四二年三月、中央公論社刊)

(4) 初出未見。『文芸と生活感動の再建』(一九四二年一〇月、四海書房刊) 収録―表題『小説の形式について』、『小説の問題』(一九四七年二月、大地書房刊)で『鷗外の「澠江抽齋」』と改題、さらに『作家論』(一九六一年一二月、筑摩書房刊)に同表題で収録。仮りにこの表題に従った。

(5) 『森鷗外必携』(一九六八年二月、学灯社刊) 所収。なお、板垣公一氏『鷗外史伝の成立―「澠江抽齋」の意義―』(『日本文芸研究』二一巻1・2)に、この作品の成立論に関係して、別の形態論がみえる。

(6)・(7) 岩波書店第二次〔戦後版〕『鷗外全集著作篇』第三十三巻・書簡七二〇(大正五年五月六日) * この「陸樓書付」は、書簡七三七(大正五年七月一六日)に、「陸樓自叙傳小キ巻物トイタシ出來上リ候」とある「自叙傳」である。これを入力した五月六日には、すでに、その百五(東京日日)が掲載されていた(大阪毎日では、その百八)。鷗外は、この自叙傳によって、おそらくは、予定していなかった杵屋勝久傳をまとめて稿を終えたのであろう。この終章ともいうべき部分と、西尾氏区分の1の、序章ともいうべき部分との照応の妙をいう説もあるけれども、右にいう事情からするおのずから生じた妙味である。

(8)・(9) 『澠江抽齋』その百十二

(10) 保自筆『抽齋の学説』と共に、鷗外題簽『抽齋親戚並門人』に収録。

(11) 「抽齋」その六十一

(12)・(13) 岩波文庫『瀝江抽齋』解説、齋藤茂吉作製目次。

(14) 小泉氏文「言語と文芸」一九六六年七月号

(15) 岩波書店戦後版、書簡六三三

(16) 「抽齋」その九

(17) 書簡六三五

(18)・(19)・(20) 「抽齋」その九

(21) 一戸氏文「文学」一九三三年八月号

(22) 書簡六三八*十一月十一日の所に配列してあるが、内容から十二月十一日へ繰下げるべきもの。

(補1) ゼネアロジは、本来、タテの関係だが、実際にはヨコの関係も付随してくる。五百の場合は、このヨコの関係の流れであるが、それがタテの関係に統合あるいは吸収されてゆく。そういう関係で、「組織の全體」がなりたつ。鷗外は、主としてタテ関係で発想しているようだが、「組織の全體」というところに、ヨコ関係の計量が十分あるとみられよう。

(補2) 『西周傳』と『能久親王事蹟』との中間の『小倉日記』の一九〇〇年一〇月七日の条に、坑夫から立身して坑主となつた貝島太吉の伝を、ジェネアロジックに略記しているのがみえる。ジェネアロジックな記述への興味の潜在と考えられるかもしれない。人や家のあとについて関心をもつことは、一般的にあるものだが。

東京大學図書館鷗外文庫架蔵諸文献の閲覧については、柳生四郎氏の一方ならぬ御配慮を得、また「独立評論」の通覧には成田図書館のお世話になり、保談話の撮影には竹盛天雄氏を煩わした。その後ほぼ十年たっている。今あらためて関係諸氏に深く感謝したい。